
完璧後輩

蒼咲 秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

完璧後輩

【Nコード】

N3735C

【作者名】

蒼咲 秀

【あらすじ】

私の持っている物全て捧げてでも、守りたい人がいました。平凡だった私の生活がある日突然消えてしまった。あなたはこの話のよくな出来事が起きたらどうしますか？

1 P・仕掛け（前書き）

蒼咲の大好きな設定の1つ、後輩モノです！！

張り切って書きますので、今回もお付き合い宜しくお願いします！！！！

1 P：仕掛け

私には、きちんと人生設計図という物が存在していて。

21歳で運命の人と巡り会って、

24歳で結婚をし、

25歳で第一子を生み、

26歳で第二子誕生。

夫は公務員で、

私は白い庭付きの家に住む専業主婦で。
道端で、近所の人と花を咲かせながら。
たまにはランチなんか行ったりもして。

何て、キチンと決めていたのに。

彼は突然やって来た。

「今、何て？」

今日の前にいるのは、明らかに私より年下の男の子。
地元の中学の制服を着ていて、
成長期がまだなのか、背も私とほぼ同じくらい。
声なんか、ボーイソプラノみたいな男の子。

…女の子みたいなんだけど。

「俺、あなたがずっと好きでした。」

可愛い顔して、その口から『俺』と聞くと、少しショックなのは何
でだろう。

まあ、どんな事があってもあたしの中で中学生は眼中になくて。
もっと言えば、弟が中3だから弟とタメな訳で。

有り得ないでしょ？

「…ごめんなさい。」

「何ですか!？」

反応早!!

「名前知らないし。」

「南 駿ミチミです!」

「初めて会ったし…。」

「僕は一年前から知ってます!」

…私は？

「弟とタメはちょっと…。」

「弟さん、中2なんですか？」

え？

「あついや、弟は中3だけど…。」

静か空気が流れた。

この子、中2？

なら尚更有り得ないよ！

この子には悪いけど、なるべく優しく、

「僕、諦められません。」

…え？

「だから、諦めさせて下さい。」

ちよつと……。

「これから、先輩にいつぱい会いに来ます。」

いつぱいつて？

どのくらい！？

「賭けませんか？

僕が先輩を諦めるのが早いか、

先輩が僕を好きになるのが早いか。」

「か、賭けないよ！私が君の事を好きになるなんて……。」

「有り得ない？」

本気？

「僕はあなたに振り向かせる自信があります。先輩は、そんな事ないと否定するなら賭けましようと言っただけです。」

この子こんな性格だった？

「…わかった。」

そんなに言うなら、受けて立とうじゃない。

先輩を見くびるなよ！

1 P：仕掛け（後書き）

如何でしたか？張り切って書いたのはいいですが、空回りしていいでしょうか！？

是非、皆さんの感想お聞かせ下さい！！！！

今回はこんな小説を最後まで頂き本当に有り難うございました。次回も是非お付き合い下さい。

2P：壊れた歯車（前書き）

始めは簡単に年下の男の子との恋愛にしようかと思ったんですが、それじゃあつまらないかなあと。

違う話として、考えてた物とくつつけると暗い話になってしまいました。

一話と話の繋げ方が無理やりじゃない？と思う方もたくさんいると思いますが、それはこれから上手いこと繋げる予定なので、もう少し付き合って頂けると幸いです。

2P：壊れた歯車

あなたには私がどう映っていますか？

「それで？」

「何が？」

只今、SHR中。

前の席の早紀がひっそり話しかけてきた。

だけど、質問の意味が唐突でわからないから聞き返したら、

「その年下君。告白されたんでしょ？」

「まあね。」

「で？当然OKするでしょ？」

「まさか！」

有り得ない。

何が悲しくて、弟より年下と付き合っちゃっての。

「えーっ！！勿体無いよお。」

「全く。」

それに、早紀だって知ってるでしょ。あたしは、今それどころじゃないの。」

「…そうだったね。」

私は、そんな事してる暇はない。

幼い頃、実の両親に先立たれた私と弟は、両親と深い関係があった今の家に養子縁組みとして入った。

生活だけではなく、2人分の学校の授業料まで出して貰っているのが申し訳なくなつて、最近バイトを始めた。

「今、あたしに出来る事は1日でも早くたくさんのお金をつくる事。それだけだよ。」

「…折角の花の女子高生なのにね。」

そんな話をしていた矢先、2限目の大好きな谷先生の数学の時間、教頭先生がドアの外で谷先生と少し話した後、私を呼び出した。早紀が私の方を振り返る。

私には、身に覚えがないから不安で仕方なかった。

妙に鳥肌がだつて、真夏なのに肌寒い気がした。

教頭からは、ひどく簡潔に、且つ重要事項のみを私に伝えた。

「君のご両親が先程事故に会って今、病院にいと連絡が入った。荷物を持って、すぐ職員室前まで来なさい。」

教頭先生の言葉で、一気に体の力が抜けてその場に崩れる。

事故って？

いつの間にか後ろに立っていた谷先生が、私を強い力で立たせる。

「しっかりしろ、春野。」

谷先生の声が頼りだった。

先生にしがみついて、ようやく立つと教室から早紀が私の鞆を持って私に渡す。

どこまでも気の利く親友だ。

親友は、教室に戻る前に私に一言言って入ってしまった。

「来なさい。」

教頭先生が私を呼ぶ。
しつかりしなきや。

私は鞆を握り締めた。

「はい。」

『あんたいつからそんな弱くなったの？』

その時間の休み時間、

「すいません、春野先輩います？」

彼が訪ねて来たなんて、私を知る由もなかった。

2P：壊れた歯車（後書き）

こんなへぼ小説をここまで見て下さって有り難うございました。
前書きに長々書いてしまいましたが、前書きの通りの理由で2話は
ドタバタしていますが、どうかもう少しお付き合い下さい。

3P：確かな場所の対価（前書き）

段々話が進むに連れて、駿が昔の人になっている気が……。話はどんどん重くはなっていますが、大事な部分ですので大切に書いて行きたいと思います。

それでは、ヘボ小説ではありますが、最後までお付き合い願います。

3P：確かな場所の対価

それから私がどうやって病院に行ったのか、正直覚えていない。ただ、タクシーに乗る際先生が懸命に私に何か言っていた。病院に着いてからは、いつの間にかある部屋の前にいた。

『霊安室』

重い銀の扉を開けると、顔に布を被った人が長い箱に入って眠っていた。

「おじ…さん？」

真っ白に変わり果てた私の親を、ただ黙って見るだけしか出来なかった。

霊安室はただ寒く、とても閑かだった。

後ろから、名前を確認された以外は、何一つ会話の無い空間。そこに、少し経った後息を切らした弟が入って来た。

「姉ちゃん！」

「…千歳。」

ポツリ呟く弟の名前は、私に小さな安心感を与えた。それと同時に、千歳の胸の中に飛び込む。嗚咽が止まらない。

千歳が力一杯抱き締めてくれる。

あたしはただこの腕にすがりつくしかなかった。

「…また…2人になっちゃったね。」

「……。」

「振り出しに…戻っちゃった…ね……。」

そんな時、扉がいきなり開き、

「春野さん、たった今重症だった春野　サエさんの意識が戻りました。」

すっかり忘れていた存在になってしまった叔母さんの知らせに、千歳と思わず笑顔が零れる。

千歳に手を引つ張ってもらいながら、叔母さんの病室に勢い良く入る。

「サエ叔母さん！」

姉弟揃って、部屋の女性を呼ぶ。

彼女は、びっくりし慌ててこちらを見た。

「叔母さん…良かった……。叔母さんだけでも…生きてて…。」

安心して、ベッドに寄りかかりながら崩れ落ちる。

不本意ではあったが、千歳と笑い合った。

『生きる』と言う事の重さを、改めて実感した気がした。

そんな中、千歳はただ黙ってこちらを見ていた叔母さんを不審に思い、声をかけた。

「叔母さん？どうかしましたか。」

「あなた達は、誰？」

神様。

あなたは酷い仕打ちをなさる。

私達を、どれだけ底に落としたいのですか。

3P：確かな場所の対価（後書き）

『駿』と言う漢字を打つのは久々な為、一発で出てきませんでした。そのくらい駿は活躍していないのですが、今の所が終わるとどんどん活躍してもらう予定です。

しかし、蒼咲は弟の方が愛着があります。

皆さんはどうでしょうか？

今回も、ドキドキしながら書きましたが、こんなへボ小説を最後まで見て下さった皆様へは本当に感謝の嵐です。

これからも日々精進していきたいと思しますので、もう少しお付き合います。

4 P・今（前書き）

ようやく駿君登場です。

そして長い間書かなくてすみませんでした。

漢字が最近全くわからなくて文にたくさんあると思いますが、多目に見て下さい……。

「おはよー。」

朝の挨拶が交う学校で、私は千歳と校門の前にいた。

「放課後迎えに来るから、ここにいてね。」

念を押すように、朝から何度も言ってる事を再度言う。

「分かってるってば。」

「あつそ。ならいいけど。」

と言いながら顔の造りが良い弟は、高等部の女子からの熱い視線をはね退けて、自分の学校に帰って行った。

あれから。

つまり、叔父が亡くなって叔母が記憶喪失になった日から。私達姉弟は、叔父の葬式や叔母の世話で結局1週間程学校に行っていないかった。

早紀や谷先生からも電話が来ていたが、それに気付いたのは昨日の夜11時過ぎだった為、結局誰とも連絡を取らなかった。

約一週間ぶりの学校は、別に何とも感じはしなかった。

何も感じなかった自分が、他人ごとのように酷く可哀想に思えた。

「チロ！」

教室に入った瞬間、中にいた早紀が私を呼ぶ。

「おはよ。」

とりあえず挨拶をしてみると、早紀が大腿で近付いて、

「何で来たの!？」

と言った。

さすがに言い過ぎじゃないですか？

「…先生から聞いた。何も出来なくてごめん。」

「そんな事ないよ。ありがとう。電話返せなくてごめんね。」

「忙しいってのはわかってたから、それはいいんだけど。それよりあんたに面会者。」

と言って、後ろにある自分の席を親指でクイッと指す。

そこには、男の子がちょこんと立っていた。

その子が近付いてきて、ポツリ言う。

「まさかまた名前忘れちゃいましたか。」

ぷうっと膨れた彼が少し可愛い。

「覚えてるよ。南 駿君でしょ。」

名前を言った瞬間、彼はパアッと笑顔になる。

うん、犬みたい。

「良かった、また忘れられてたら落ち込んでもう高等部に来れない所でした。」

くすつと笑う彼。

…あれ？

今…

「あっそう言えば…駿君何で中学生なのにここにいるの!」

横で早紀が

「何を今更」と呟く。

駿君は駿君でニコニコしてるだけだし。

「駿君、駄目だよ。これから授業があるでしょ?」

彼の背中を押しながら、教室の外に出る。

「ちよっ…先輩!」

チャイムまで、後20分弱。

「分かりました。なら放課後迎えに来ますから。」

と言って走って帰って行った。

「嵐が去った……。」「

「モテモテだね。」

「止めてよ。」

体が重い。
頭が痛い。
心が苦しい。

「顔色悪いけど大丈夫？」

「んー、ダメかも。」

「おい。」

こんな会話が懐かしく、笑いが込み上げる。

「ふはは、大丈夫。休まないよ。ただでさえ最近休みがちで授業出てなかったんだし。」

自分の席に戻る。

こんなに椅子って固かったっけ。

机ってこんなに大きかったっけ。

隣の席ってあんなに遠かった？

一つ一つが不安になる。

「変わる」という事がこんなにも怖いんだ。

あー、やっぱり気持ち悪いな。

授業が始まるチャイムと同時にそっと教室を出る。

途中座りながらも、保健室に着く。

「失礼します。」

ノックをして入る。

先生は机に向かって仕事中だった。

私と目が合うと、少し悲しい顔をして『いらっしやい』と手招きをした。

「2年の春野さんね。」

「えっ何で名前……。」

私は一応元気だけが取り柄だった為、保健室は普段出入りはしない。

多分これが初めてだと思う。

「あなたの事は最近、職員室では持ち切りよ。」

あー、だからあんな顔したんだ。

大人しく先生の机の前にある丸椅子に座る。

「それで。どうしたの。」

「具合が良くないので、少し寝かせて貰ってもいいですか。」

「…いいわ。一番右のベッドを使いなさい。」

お礼を言っ て立ち上がり、ベッドまで歩いてふと立ち止まる。

「先生。」

「なあに。」

「先生ってお子さん何歳ですか。」

「今年の１１月で２歳。」

「可愛い？」

「そりゃあもう。」

「…幸せ？」

「とっても。」

何でそんな事を聞いたのかはわからないけど、

目の前にいる人は幸せなんだ。

なんて素敵な事だろうと思った。

その後、ベッドに入った瞬間暖かい気持ちになりすぐに眠れた。

「で？こいつ誰。」

放課後。

バカな私。

朝あんなにも言われたのに、千歳が来る事を忘れてた。

昼あんなにしつこかった駿君が来る事を忘れてた。

肝心の私は、ガッツリ教室で友達と話して門まで来た。

そして気がついた。

門の両側の男子2人に。

2人同時に『遅い！』

と怒鳴られる。

あたしは友達に謝り、走って彼らの所に行く。

2人は自分の声を掛けた相手に、もう一人かけた相手が他にいるもんだから、驚いてポカンとしていた。

ねえ。

あなたは今『幸せ』？

そんなの、今の私には答えられないけど。

少なくとも、私は一人じゃない。

4 P・今（後書き）

今回もこんなへボ小説を読んで下さってありがとうございました。
まだ未熟者ですが、どうか次もお付き合い下さいませ。
ありがとうございました。

5 P・愛しい時間（前書き）

最近不定期です。

そんな中でも読んで下さる人がいて、とっても幸せだと感じています。

こんなへボ小説ですが、最後までお付き合いお願い致します。

5 P・愛しい時間

「で？」

放課後。

学校の近くのファーストフード店で私は向かいに座る弟と隣に座る男の子に小さく縮こまっていた。

「朝あんなに言っただのに!？」

「…忘れてました。」

千歳が怖い。

でもそれは愛情の裏返し。

千歳は私を一人にしないように、叔母さんのお見舞いに行くとか言っ
て迎えに来てくれている。
分かってるんだけど。

「バカじゃないの!？」

…怖いよ。

「しかも誰こいつ!？」

と言って私の隣に座ってる男の子に聞く。

駿君は眉間にシワを寄せ、

「北条中学2年の南。お前こそ千尋先輩の何だよ。」

「えっ!？」

千歳と私が一緒に叫ぶ。

だって、

「お前、同じ学校かよ!」

まあ、2人とも学ランだしね。

この辺じや殆どの学校が男子は学ラン。

だから、制服で判断するのはまず無理。

その証拠に。

当人である千歳と駿君さえ驚いている。

「俺は春野 千歳。千尋の弟でお前の先輩。」

「えっ!?!...じゃあ……。」

「俺、北条中学の3年だもん。」

駿君はただでさえ大きな目をさらに見開いて、私と千歳を見比べる。

「あと、俺には敬語使えよ。」

千歳さん、何か今日冷たくないでしょうか。

まあ仕方ないね。私達はシスコン、ブラコン姉弟だもんね。

「そろそろ病院行くよ。」

千歳が鞆を肩にかけ私に言う。

「もう?」

「うん。叔母さん今日検査だから、早めに行かないと。」

はあい、としつかり者の弟に従う。

「駿君ごめんね。そういう訳だから行かないと。」

「あっはい……。」

バタバタ用意をする私達を啞然として見ている。

じゃあね。と言うと駿君に呼び止められる。

「また会いに行ってもいいですか。」

眉を下げて言う彼に、

「待ってるね。」

と言うと、とても嬉しそうに笑う。

その顔に、不覚にもドキッとさせられる。

病院までの道のりの間、ムスツとして千歳が私に聞いてくる。

「あいつ、チ口の彼氏？」

「まさか。最近仲良くなった子。」

「でも告られたんでしょ。」

えっ！？

「何で知ってるの！？」

「早紀さん。」

あのお喋りが！！

「叔母さん？千尋と千歳です。入ります。」

ドアをノックして入ると、叔母さんが白いベッドの上で眠っていた。叔母さんはあれから大分元気になった。

怪我也完治に近い状態まで回復した。

心以外は。

「俺、花の水変えてくる。」

千歳が出て行ってしまった後、私だけが息を吸っているだけのよう
な気がした。

不安になって、叔母さんが息をしている事を確認してしまう。
その場が怖くなって、水道まで千歳を迎えに行った。

「どうしたの？」

「……。」

千歳の後ろをひよこひよこついて行きながら、病室に戻る。
しばらくして、ドアをノックされ先生が入ってきた。

「ちよつといいかな？」

と言われ、部屋の外に出る。

「春野さんだけど、そろそろ退院出来ると思うんだ。」

「え？」

「家に帰ればもしかしたら、記憶が…ね。」

先生が言葉を濁す。

『退院』

この言葉がこんなにも早く聞けるなんて思わなかった。

「勿論、これからは病院には来てもらうけどね。」と先生は言う。

「これからが大変だと思うけど、一緒に頑張りましょう。」

「はい。ありがとうございます。」

その日の帰り道は複雑な気持ちだった。

千歳も同じようで、2人して口を閉ざして帰る。

家には、

「おかえり」と言ってくれる人がもういない。

なのに、その人が帰ってくる。

おそらく、昔と同じように迎えてくれる事はないと思う。

その事は、静かなこの家が物語ってる。

必然的に、テレビをつける事が多くなった。

でもただつけるだけで、聞いてはいない。

来週。

叔母さんが帰ってくる。その事が、私にとってとても辛い事の気がしてならないように思えた。

5 P・愛しい時間（後書き）

こんな小説を最後まで見て下さってありがとうございました。
先は長いですが、今後ともお付き合いお願い致します。

6P：会いたい（前書き）

あまりにも久々過ぎて、駿の名前を忘れてしまいました……。しかし重いですね！！

読んで下さった方は気分が落ちますよね。すみません。

そして過去最高に長いです。

よくわからない所で2Pに入ってます。

本当に読みにくくてすみません。

それでもこうして読んで下さる方に大感謝です！！！！

6P：会いたい

6月末。

今年は夏が駆け足できたため、一足早く私達の学校は夏セーラーになった。

隣を歩いている弟は暑苦しい学ランを、なるべく涼しくなるよう着崩している。

今日、叔母さんが帰ってくる。

家はすっかり綺麗になって、新しい住人をいつでも迎え入れる体制に。

部屋が綺麗だ。

それだけで鼓動が速くなる。

背中をポンと押される。

「学校行くよ？」

頷いて千歳の後ろに着いて行く。

家を出るまで気が重い。家を出たら足が動く。

頑張れ、あたし。

千歳と別れて教室に向かっていると、校舎の窓から男の子がこちらに向かって大きく手を振っている。

「千尋先輩あい！」

周りの人がチラチラ私を見ている。

私は黙って知らんぷり。

でも体は正直で。

顔は赤くなつて、異常に早足になる。

早足から、最後は本気で全力疾走をして教室に行く。

ドアを開けて、先程の男の子の名前を呼ぶ。

「っ駿君！」名前を呼ばれた男の子は、嬉しそうに私の元に走って来る。

「千尋先輩、おはようございます。」

「自分の学校にちゃんと……」

「大丈夫です！僕、足には自信あるので……」

元気よく自信たっぷり言う彼に、ため息をつきながらも自然に笑顔が零れる。

息を整え、席に着くと駿君が顔をひょいと覗かせる。

「どうしたの？」

「先輩……今日元気ないですね。」

……え？

「あたしそんな分かりやすい？」

「少なくとも僕には。」

うーん……。どう意味だろ。

「毎日先輩を見てる僕には分かるって言う事です。」

「あつ……はい。」

心を見透かされた為か、あるいはいきなりの告白にか急に顔が熱くなる。

「今日は大切な人が家に来るんだ。」

「……叔母さん？」

この子鋭いな！

「……もし、」

「え????」

「もし何かあったらメール下さい。アドレス入れたので。」
目頭が熱くなる。もしかしたらその言葉を待っていたのかもしれない。

ん？

今何て！？

慌てて携帯を開く。

あ行から探して行くと、

『しゅん』

で新しく入っていたアドレス。

誕生日や住所まで丁寧に書かれた個人情報と共に。

「待ってますから。」

その言葉を言うと、彼は教室を出て行った。

チャイムが鳴ったのは、彼が出て行った2分後だった。

生徒の別れの挨拶が飛び交う時、私は一人で屋上にいた。
千歳と待ち合わせの時間まで、あと30分ある。

「あと少し……。」

今日程1日が短く感じられる日はなかった。

目を瞑ると、叔父さんと叔母さんが思い浮かぶ。

叔父さんは、最後に見たときの姿で。

叔母さんは、自分を見た時の驚いた顔で。

叔母さん達をお母さんと呼べなくなったのは何時ぐらいだったろう。

小さい頃は平気だった事が、ある日ぱったり出来なくなった。

初めて『叔母さん』と呼んだ時の驚いた顔は、あの時と同じ顔だった。

それでも彼女は、にっこり笑いいつもと同じように接した。

千歳も不思議に思い、その内彼も同じように呼んだ。

叔父さんは嫌がったが、叔母さんはただ笑っただけだった。

思えば、彼女が怒った所を見た事がない。

泣いているのは嫌という程見た。

大抵は夜だが、一度だけ忘れ物してお昼学校を抜けて帰ると、叔母さんが私達姉弟の部屋の前で泣いていた事があった。

その姿は、何とも切なく声を掛けられず私は引き返す事しか出来なかった。

「あれからどのくらい経ったのかな。」

独り言を呟くと同時に、千歳から電話がくる。

下を見ると、校門に人ばかり。

あれかな。

走って校門に行くと、案の定ぶすつとした顔で千歳が突っ立っていた。

周りには、たくさんの女の子の山。

「遅い!!」

お怒りの千歳。

平謝りの私。

2人で急いで学校を出る。
後ろの歓声が、千歳の苦労を物語っていた。

病室のドアの所に立つと、足がすくむ。

「チロ？」

「……ん、大丈夫。」

私はあなたのお姉ちゃんだからね。

戸を開けると、叔母さんは医者と笑いながら話をしていた。
少ない荷物は、小さなボストンバックにまとめて、下にちょこんと置いてある。

「叔母さん、遅くなってごめんね。こんにちは、先生」
礼儀正しく挨拶をする。

足がガクガクしてる気がする。「こんにちは、待ってたよ。」
先生がニツコリ笑う。

千歳も挨拶をして話しかけながら、叔母さんの荷物をひょいと持ち、叔母さんを立たせる。

「下にタクシー待たせてるから行こうか。」
叔母さんは黙ってついてくる。

ねえ、叔母さん。

あなたには私達がどう映ってる？

先生との別れは、やけにあっさりとしたものだった。

通院するから最後という訳ではないが、やはり想像と違った為少し拍子抜けをしてしまったくらいだ。タクシーの中では、千歳が道案内をする以外誰も口を開かなかった。

退院したというのに、叔母さんはニコリともしない。それが私を不安にさせる一方だった。

「叔母さん、ここが今日から住む家だよ。」

千歳が叔母さんに説明をする。

叔母さんは、見渡しながら恐る恐る家に入った。

夜は実に微妙だった。

みんな遠慮しながら話すものだから、会話が続かない。かといってテレビを付けるほど沈黙が長い訳でもない。

叔母さんは、質問をすれば返してはくれるが自分からは決してしなかった。

叔母さんがお風呂に入ってる間、千歳が背中をポンと叩き私を部屋に入れた。

「寝なよ。後は俺一人で大丈夫だし。」

おやすみ、と言ってドアを閉められる。

その後すぐに、ドアの向こう側で千歳と叔母さんが談笑をしているのが聞こえた。

なんだか無性に切なくなる。

音を立ててはいけない気がした。

静かにベッドに入っても眠れない。

やがて叔母さんと千歳がそれぞれの部屋に入った瞬間、私は携帯を持って走って家を出た。

生暖かい風しか吹かない外は、静まり返った闇以外特にいつもと変わらない夜だった。

変わらない筈なのに、私にはとてつもなく寂しく感じ、無意識に携帯のアドレスを開く。

時間はとくに夜と呼べる時間帯を過ぎている。

それでもかけた相手は待っていてくれるような気がした。相手は呼び出し音が鳴ったと同時くらいに出る。

それだけで涙が出そうになる。

「千尋先輩？」

声を聞いてそこに崩れ落ちた。

「先輩？どうしたんですか？俺に電話かけたって事は何かあったんですか？」

ダメだ。

涙がとまらない。

「先輩今どこですか？」

「…家の前。」

「え！？ちよっ、待って！そこにいて下さいね！」

慌てた彼は、そう言い残して電話を切る。
待ってよ。

私を一人にしないで。
さっきとはまた別の涙が出そうになった瞬間、

「っ千尋先輩!!」

少し先の曲がり角から、彼が走ってくる。
暗くても分かるよ。
理由なんて一つしかない。

私は立ち上がって、彼の元まで走る。
彼が手を広げた瞬間に飛び込んだ。

「駿君!!」

涙が溢れる。
会いたかった。
あなたに。

あなた以外いない。
今気付いたの。

あなたが必要だって事が。

6P・会いたい（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございました。
頑張って次は早めに更新したいです……。

7P：孤独と君（前書き）

今回は短めです。

短い方が読みやすいですかねえ。

7P：孤独と君

寒い空の下で。

私は柄にもなく女の子になっていて。

駿君に抱きついてしまった事への恥ずかしさから、私は駿君を前に向かせ彼の背中に顔を埋める。

「先輩？」

駿君が優しく私の名前を呼ぶもんだから。

顔が火照って。

体のあちこちが変だ。

「どーしたんですかあ？」

「何でもない！今こっち向いたら、本気で顔面パンチする。」

駿君がピタッと固まる。

私何やってるんだろう。

そつと彼から体を離す。

「…先輩？」

前を向きながら、駿君は私の名を呼ぶ。

「そのまま聞いてね。」

私、今日本当に頑張るつもりだったの。

大丈夫だと思っただの。

でもやっぱり誰かに頼らないと、私は立ってられない。

涙を拭ぐってくれる人がいないと、私は前を向く事が出来ない。

走って抱きしめてくれる人がいないと、
自分が消えてしまうの。

だから……。」

言いたい事がまとまらない。

こんな事を伝えたい訳じゃないのに。

ずるい。

私は狡い。

言葉が遠回りして、
君まで届かない。

「……先輩。」

「……。」

「先輩ってば。」

駿君がくるつと私を見る。

「俺、今日先輩に会えて凄く嬉しかったです。」

「……え？」

「先輩に会えて幸せなんです。」

やめて。

やめてよ。

涙が止まらない。

君をそれをすつと拭う。

「俺は先輩が泣きそうになったら、何度でもこつします。」

「……………」
「ありがとう。」

次の日。

千歳に聞いたけれど、

駿君は風邪で学校を休んだらしい。

もしかして？

もっと早く電話すれば良かったね。

7 P・孤独と君（後書き）

今回もこんなしょうもない小説を最後まで見て下さって本当にありがとうございます。

精一杯書いて行くつもりなのでもう少しお付き合いして下さいと幸いです。

蒼咲

8 P・愛の形（前書き）

しばらく、ずっと書かずに今日まで来てしまいました。実は小説は出来ていたんですけども、なかなか投稿出来ずにいました。溜めたくせに仕上がりは悪いですが、一生懸命書きましたので、是非読んでいただければなあと思います。

8 P・愛の形

「で？」

「え？」

お昼休み。

暖かい日差しを受けながら、私と早紀は屋上でお弁当を広げる。

「え、じゃなくてさ。」

「じゃなくて？」

「何で駿君とそこまでいったのに告らないかなー。」

「…ねー。」

早紀がキッと睨む。

「あんたね、そーやって余裕ぶっこいてると駿君誰かに持って行かれるんだから。」

「誰かって？」

「学校の子とか。駿君結構モテるらしいよ。」

へー。

うん、あの顔でもてないのは世の男子にケンカ売ってるな。

「…何でそんな事知ってるの？」

「それは内緒。」

おー、怖いこと。

「…別に嫌いじゃないんだよ？」

「うん？」

「駿君。…でもね、何だろ。何かこう、しっくり来ないような……。」

「言葉を選びながら、ゆっくり話す。」

「千歳君より下だからとか？」

「…ああ、かも。」

「んな、ありきたりな。」

「どういう意味でしょう。」

「ほら、あたし告白されるなんて初めてだったから。」

「どうしていいかわからないんだ。」

告白なんて勿論私からもした事がないから。

今回、どうやって駿君に気持ちを伝えればいいかわからない。

「ねえ、千尋。」

「ん？」

「あたし、『告白』って素敵な事だと思う。恥ずかしがるような事じゃないよ？」

「…うん。」

「駿君だって待ってると思う。」

『素敵』

うん。私もそう思う。

ちゃんと向き合う事も大事。
それに。

もうあの夜、こうする事を決めていたのかもしれない。

「…早紀。私、駿君に電話してくる。」

机の中から携帯をだして。

昼休みはあと15分。

電話をして、

放課後一緒に帰ってその時に言うんだ。

私の気持ち。

昼休み中に、私は駿君に電話をした。

短い呼び出し音で、駿君は心なしか少し弾んだ声で出るからおかしくて。

「何かいい事あった？」何て聞いたら、

「先輩が電話くれたんで！」

と言うもんだから、思わず微笑んでしまう。

「それよりどうしたんですか？」

「え？…あつ！そうそう。今日の放課後一緒に帰らない？」

「はい！」

あまりの返事の速さに少し怯む。

「俺、学校終わったらダッシュで行くんで校門で待ってて貰ってもいいですか。」

「うん、わかった。でもそんなに急がなくていいよ。」

思わず吹き出しながら軽く注意。

「いーえ。俺は先輩に早く会いたいんです！」

電話の向こうからブーブー言う君。

それと同時に電話の向こうから鳴る鐘の音。

「…じゃあ、また放課後。」

「うん、またね。」

と言いつつ、電話が切れない。

「…は、早く切らないと、次の授業遅れるよ?」

「わ、わかってます。先輩が切ったら行きます。」

「何で私!?」

「俺から切るのが嫌なんです。」

えー!?!?

そんな事言われたら……

「私からも切れない。」

何か意地になってしまう。

「俺だつて切りません。」

駿君も意地になるから、何だかおかしくて。

2人同じタイミングで笑う。

電話の向こうで笑う駿君に、

「じゃあ、一緒に切ろう。」

と提案。

駿君は

「そうですね。」なんて言う。

「じゃあ私がかけ声かけるから、それに合わせて切ろうか。」
「はい。」
「せーっの」

かけ声を言った癖に、電源ボタンを押せず固まった私。
そつと携帯を耳に当てると、
電話の向こうは、機械の一定の音。

でも、何かおかしい。
思い切って大きな声で読んでみる。

「っ駿君！」

「うわぁー!!」

案の定、プープー言っていた彼が驚いて。
その拍子で電話が切れて、電話の向こうから本物の音になる。
でも決して虚しい気持ちにはならなかった。

「何やってんだ。」
思い出し笑いをしながら、
私はチャイムと同時に屋上を出た。

放課後。

亜美に別れを告げて、げた箱から外を見ると、まだ駿君は来てないみたい。

ゆっくり靴を履く。

周りは下校の生徒だらけ。

今日は日差しが強いからもう少しここにしよう。

ふつと息をつき、玄関の端にある傘立ての前に立つ。
勿論、何もささっていない。

「いよいよ言うんだ。」

私の気持ち。

キチンと彼に伝えるんだ。

そう思うと胸が苦しい。

あー、何だか気分が悪くなりそう。

そもそも何で私は気持ちを伝えようとしたんだっけ？
彼を必要と思ったから？

それって本当に恋？

自分に問いかければ問いかけるほど迷宮に入り込む。
いや。

駿君の事を私は好きなんだ。

半ば自分に暗示をかけるように考える。

今日は伝えるんだ。
伝えなきゃ。

それから。

5分後に必死で謝りながら、汗だくで私の所に走って来たのは、言
うまでも無い。

8P・愛の形（後書き）

こんなへボ作品を最後まで本当に読んで下さってありがとうございます。
ます。これからはもっと早く更新出来ればなっと思ひます。

9 P・真実への前触れ（前書き）

今回はなるべく早めに、且つ短めで。笑

9 P：真実への前触れ

何か変な感じ。

いつもの2人なら、楽しく会話が弾んで楽しい帰り道のはずなのに、今日は2人とも黙って、いつもの道をゆっくり歩く。

日差しがまだ暑いくて、じりじり首が焼けていくのを感じ、腕を見ると真っ赤だった。

途中、コンビニに寄って、公園で涼みながら話す事にした。

ブランコに乗ってゆっくり漕ぐ。

駿君はとくに食べ終わって、棒アイスの棒だけ加え高く、高く漕いでいる。

「あの、さ。」

あたしが喋るのを知っていたかのように、駿君はいつの間にかブランコを減速していた。

「はい。」

「えっと、さ。今日は、駿君に伝えたい事があってさ。」

「…はい。」

沈黙が流れる。

すぐ近くで、蝉が鳴いている。

彼らには恋愛をしている暇があるのだろうか。

1週間という短い命の中で。

いやいや。

そんな他の事考えてる余裕なんてあたしにはないのに。

意を決して、拳に力を入れる。

「…あたしね。」

失敗した！

何度も、言い始めは

「私」ってきちんと言おうってシュミレーションしたのに。
思っていた言葉とは違う言葉に動揺して、困っていると

ブルブル

何て空気の読めない携帯何だろう。

いや、逆に読めてるのかな。

まあそんな事はどうでも良くて。

携帯を開くとディスプレイに

「千歳」の文字。

馬鹿弟めっ。

駿君に一言

「ごめんねっ」と言っと、

「大丈夫ですよ。」とまたゆっくりブランコを漕ぐ。

少し怒り気味に、非がない声だけの千歳に向かって

「何っ!？」

と言う。

千歳の第一声に思わずあたしは携帯を落とす。

駿君が慌ててブランコを止めて、

「どうしたんですか!？」と顔をのぞき込んでる。

電話の向こうでは千歳が

「またあのガキいるな!？」なんて聞こえる。

慌てて携帯を持って、すぐ行くと千歳に言っと電話を切る。

勿論駿君は、

「えっ?」て言ってる。

また慌てて謝り、全力疾走で公園を出る。

「おばさんが書き置き残して消えた。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3735c/>

完璧後輩

2010年10月12日06時26分発行